

青年海外協力隊へ インタビュー！

国際協力機構（JICA）
青年海外協力隊員

小川 真奈 さん（瀬戸自治会）



『青年海外協力隊』としてケニアでの派遣期間を終えた小川さんに、青年海外協力隊の活動などについてお話を伺いました。



■小川さんの経歴

田布施中学校、柳井高校を卒業後、関西外国語大学短期大学部英米語学科へ入学。卒業後、関西学院大学総合政策学科へ編入学。神戸大学大学院へ進み、国際協力研究科で地域協力政策を学ぶ。

関西のプラント機器メーカーで勤務後、平成30年3月～令和2年3月まで青年海外協力隊に参加。

**Q 青年海外協力隊に応募しようと思っ
たきっかけは？**

大学3年生のときにゼミのフィールドワークでフィリピンに行き、マニラのスラム街を訪れ、初めて発展途上国の現場を見ました。そこで子ども達に衛生教育をし、一番印象的だった点が、厳しい貧困生活の中でも笑顔が輝いていたところでした。そこから現場のことをもっと知りたい、貧困地域で現地の人と関わり何か貢献したいと思ったことがきっかけで、将来青年海外協力隊に応募しようと思いました。

Q ケニアでの活動内容は？

特産品である『タイタバスケット』の販路拡大や品質向上を支援する活動を行いました。バスケット製作にかかっている現状を把握し、サイズ・色・形が顧客の注文通りに製作できない点や生産

者によって不均一な品質である点が問題だと感じ、製作のフォローや品質向上・品質管理に関するアドバイス・トレーニングを実施しました。また、国内外の企業や土産屋にタイタバスケットを紹介したり、地元や国際的な展示会に出展したりして、新規顧客を獲得するなどの販路拡大にも努めました。

Q ケニアでの活動で大変だったことは？

生産者への支援活動をする際、協力隊の立場を正しく理解してもらうことや生産者の援助頼りの姿勢を改善することが最も苦労しました。私が活動を終えても、生産者達自身で販路拡大に向けた取組を行えるよう、密なコミュニケーション・ションを心掛けて活動しました。また、大量注文の制作時に、顧客指定の仕様や品質を満たせず、納品不可や廃棄せざるを得ない商品が多くあったので、生産者の製作技術や品質管理を向上させる点が大変でした。

Q 派遣期間を終えて得たことは？

文化や価値観が異なるケニアの人々と協働することにより、自身の知見や視点を広げることができ、多様性社会で個々を尊重しながら粘り強く対応する姿勢を養いました。今後は、培った対人対応力と課題解決能力を活かし、発展途上国だけではなく、日本での国際協力や地方創生にも貢献したいです。

■ タイタバスケットとは？

タイタ地域（小川さんが活動した地域）で生産されている特産品で『サイザル』と呼ばれる植物の繊維から伝統的な手法で丹念に手作りされています。バスケット作りの技術は、代々受け継がれています。



▲町長室にて活動報告